

家族を守ること

三年 栗原微始

「マイクロチップを埋めこむなんて、おかしいよ!」

私は思わず猫のパンチを抱きかかえた。私が幼い頃からずっと一緒に過してきたパンチ。イタズラ好きで、たまに憎たらしく思うこともあるけれど私はそんなパンチが大好きだ。悲しくて辛い時も、そっとそばに居て励ましてくれる。私にとってパンチは、両親や祖母、姉と同じようにかげがえのない存在なのだ。

しかし、家族全員で食卓を囲んでいたある日。母は最近、話題となっている「ペットへのマイクロチップ装着の義務化」の話を私達にした。パンチにもマイクロチップをつけようという話だった。正直な気持ち、私はそれに否定的だった。

義務化については、新聞を読んだことをきっかけになんとなくのことは知っていた。その装着したマイクロチップを専用の機械で読み取ると、事前に登録した情報からペットの身元が確認できるようになるそうだ。この仕組みを活用すると、ペットが迷子になってしまったり、自然災害の被害で離ればなれになってしまったりしても、より早く再会できるよう手助けすることができる。さらには、ペット

の身元がすぐ分かるようになることで、ペットを飼うことへの責任感が増す。それによって、ペットを無責任に捨ててしまう人が減るのではないかと期待されているのだ。

けれど、私はとても便利だと思う反面、ペットにマイクロチップを入れることに少しの抵抗感があった。なぜなら、ペットにマイクロチップを入れるとなると、どこかペットを物、所有物としてあつかっているような印象をうけるからだ。飼い主にとってペットは家族。それを自分の教科書やノートに名前を書くように、ペットに印をつけるというのは許せないものがあった。

そう思った時、母は私にこう言った。

「みはるが迷子になった時も迷子カードを見せたよね。それと同じだよ。」

母は、私が迷子になった時に困らないよう連絡先などを書いたカードをもたせてくれていた。それと同じと言われて、はっとした。パンチは猫だから、当然、人の言葉を話すことはできない。だから、私達が言葉になってあげないといけないのだ。マイクロチップはその言葉となるもので、いざとなった時パンチを守るものとなるはずだ。

「やっぱり、入れよう。」

大切な家族を守りたい。先程までの迷いが一切なくなつて爽やかな気持ちだった。

私のように、マイクロチップを入れることに抵抗感がある人もたくさんいると思う。けれど、ペットを本当に大切にしているのなら、もう一度しっかり考えてみてほしい。このマイクロチップが、いつかあなたの家族を守る日が来るはずだから。